

# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の1年目)

## 1. 研究課題

東方ユーラシア馬文化の研究

A Study of Horse Culture in Eastern Eurasia

## 2. 研究代表者氏名

諫早 直人

Isahaya Naoto

## 3. 研究期間

2021年4月-2024年3月(1年目)

## 4. 研究目的

東方ユーラシアの諸地域は、中国でさえも家畜馬や馬車の利用において先進地域ではなく、西方からの直・間接的な影響を受けて二次的に始まったことが明らかとなって久しい。またおおむね前1千年紀後半から後1千年紀前半にかけて、馬車から騎馬へと戦争における利用形態が大きく変化するとともに、家畜馬や騎馬の風習がそれまで認められなかった地域に急速に拡散していく。日本列島における馬の出現は、この変化の最終局面として捉えられる。このように個別の地域・時代に対して個々に進められてきた研究成果を紡ぎ合わせた概観は可能ではあるが、東方ユーラシアにおける家畜馬や馬車・騎馬利用の出現や普及、その後の展開のプロセスについて、資料の実態に即しつつも一貫した視野のもとに論じた研究はまだほとんどない。本研究は、こうした問題点に鑑み、中国・朝鮮半島・日本列島の馬車・騎馬文化と馬匹生産について、ユーラシア草原地帯と比較しつつ、関連する考古資料と文献史料の検討をもとに明らかにしようとするものである。

It has long been revealed that Eastern Eurasia - including even China - came a late “second” to the West in adopting utilization of domestic horses and horse-drawn vehicles. From the latter half of the 1st millennium B.C. through the first half of the 1st millennium A.D., how people used horses in war changed drastically, from the use of chariots to riding on horseback. And the methods used in the domestication of horses and riding rapidly spread to new areas. The appearance of horses on the Japanese archipelago can be seen as the final phase of this change. Thus, it is possible to present a rough overview by connecting research results for individual regions and periods. However, there are few consistent studies on the emergence and popularization of domestic horses,

chariots and horse-riding in Eastern Eurasia, and the subsequent development process, that are based on archaeological data. In light of these issues, this study provides some clarity regarding equine culture and horse breeding in China, the Korean Peninsula, and the Japanese archipelago using archaeological materials and historical documents comparing developments in these areas with those on the Eurasian Steppes.

#### 5. 本年度の研究実施状況

研究班1年目である本年度は、共同研究室での少数対面と、Zoomによるオンライン会議とを併用し、合計6回の研究会を開催した。6回の定例研究会を通じて、ユーラシア草原地帯の馬具、東アジア馬具の製作技法の系譜、中国中世における馬車から牛車への転換、日本列島における初期の馬と塩の関係などの問題を議論し、また外部からゲスト研究者を招いて遺跡出土馬の理化学分析の成果や日唐の馬匹管理・交通制度の問題などについて議論を深めた。また、それらとは別に、本研究班の前身となる過去2年間の若手A班の研究成果にもとづき、11月に一般向けのシンポジウム「考古学からみた古代東アジアの馬利用」を開催し、ユーラシア西方におけるウマの家畜化から騎乗まで、その古代中国への伝播と変容、そして中国における馬の育成の問題、騎馬文化の東伝の問題などを論じた。来年度にはシンポジウムの内容をもとにした一般向けの書籍刊行も予定している。

#### 6. 本年度の研究実施内容

- 2021-05-21 曹操高陵出土馬具が提起する問題 発表者 諫早直人 京都府立大学
- 2021-06-18 駿馬と鈍牛—東アジア古代の車社会史 発表者 岡村秀典 京都大学人文科学研究所
- 2021-07-16 遺跡出土馬の理化学分析から探る東アジアの馬飼育 発表者 覚張隆史 金沢大学
- 2021-10-29 ユーラシアの馬具と馬装 発表者 大谷育恵 京都大学白眉センター
- 2022-01-21 唐代厩牧令の復原と日唐の馬匹管理・交通制度 発表者 河野保博 立教大学
- 2022-02-18 馬と塩の関係について：古墳時代中後期の奈良盆地の事例を起点に 発表者 青柳泰介 奈良県立橿原考古学研究所

#### 7. 共同研究会に関連した公表実績

人文研アカデミーシンポジウム「考古学からみた古代東アジアの馬利用」（2021年11月21日、オンライン開催）

#### 8. 研究班員

所内

向井佑介、岡村秀典、古松崇志、藤井律之

学内

吉井秀夫(文学研究科)、坂川幸祐(総合博物館)、大谷育恵(白眉センター)

学外

諫早直人(京都府立大学文学部)、篠原徹(国立歴史民俗博物館)、森下章司(大手前大学文学部)、井上直樹(京都府立大学文学部)、中村大介(埼玉大学教養学部)、青柳泰介(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館)、佐藤健太郎(関西大学博物館)、菊地大樹(蘭州大学歴史文化学院)、Joseph Ryan(岡山大学社会文化科学研究科)、石谷慎(黒川古文化研究所)、片山健太郎(奈良文化財研究所)、大平理紗(京都府立大学文学部)、伍雅涵(京都府立大学文学部)、王含元(北京大学考古文博学院)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)	1	7	0	1	1	0	31	0	4	4	0
		(1)	(0)	(0)	(0)	(0)	(1)	(0)	(0)	(0)	(0)
国立大学	3	3	0	1	0	0	12	0	1	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
公立大学	1	3	1	2	2	2	18	6	12	12	12
		(2)	(1)	(2)	(2)	(2)	(12)	(6)	(12)	(12)	(12)
私立大学	4	4	0	0	0	0	12	0	0	0	0
		(1)	(0)	(0)	(0)	(0)	(3)	(0)	(0)	(0)	(0)
大学共同利用機関法人	3	3	0	0	0	0	9	0	0	0	0
		(1)	(0)	(0)	(0)	(0)	(2)	(0)	(0)	(0)	(0)
独立行政法人等公的研究機関	3	3	0	1	1	0	7	0	1	1	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
民間機関	1	1	0	1	1	0	4	0	4	4	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
外国機関	2	2	1	1	1	1	6	3	3	3	3
		(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(3)	(3)	(3)	(3)	(3)
その他 ※	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
計	18	26	2	7	6	3	99	9	25	24	15
		(6)	(2)	(3)	(3)	(3)	(21)	(9)	(15)	(15)	(15)
※「その他」の区分受入がある場合 具体的な所属等名称を記載：例) 高校教員 無所属の場合は機関数 0 とカウントし、この欄の記載不要											

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)				
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)				
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	4			
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)				
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	1			

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
馬と古代社会	1	R3. 5	馬匹生産地の形成と交通路	諫早直人
北方民族考古 第11輯	1	R3. 6	馬文化在東亜的東伝進程	諫早直人 (張嘉欣・石艶艶・尤悦訳)
技と慧眼一塚 本敏夫さん還 暦記念論集一	1	R3. 12	曹操高陵出土馬具が語るもの	諫早直人
国家形成期の 近畿地方にお ける馬と塩の 関係に関する 基礎的研究	1	R4. 3	文献史料にみる中国古代の馬と塩	菊地大樹

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
国家形成期の近畿地方における馬と塩の 関係に関する基礎的研究	1	R4.3	大和の木製鞍と古墳時代の馬匹利用	諫早直人

本年度 共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

研究書の名称	編著者名	発行年月	出版社名
東アジア古代の車社会史	岡村秀典	R3.7	臨川書店
国家形成期の近畿地方における馬と塩の 関係に関する基礎的研究	青柳泰介	R4.3	奈良県立橿原考古学研究所

11. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

新型コロナウイルス流行の影響により、班員旅費・招へい旅費などが使用できなかったため。

12. 次年度の研究実施計画

本研究班2年目にあたる次年度も、6回の研究会を計画しており、モンゴルと中国の調査・研究成果を軸に共同研究を進めていく予定である。初年度の研究会とシンポジウムでは、主としてユーラシア草原地帯から中国への馬文化の伝播と変容について、考古学の研究成果を中心にとりあげたのに対し、次年度は民俗学の研究成果や唐宋以降の中国と草原地帯との関係をふまえて、古代・中世・近世から現在へとつらなるユーラシアの馬文化をとらえなおす。5月の第1回研究会は家畜と栽培植物の関係を中心とした文化伝播の問題、6月の第2回研究会はモンゴル帝国のチンギス・カン祭祀と馬についての考古学的研究成果、また第3回研究会はモンゴル匈奴墓の発掘成果にもとづく馬上戦闘武器の研究成果などをとりあげる予定である。

13. 次年度の経費

		開催回数	国内出張旅費（延べ人）	支出予定額
国内旅費	研究会参加費	6	50000円×6人	300000
	一般旅費			
海外旅費	渡航旅費			
	招へい旅費	1	150000円×1人	150000
謝金（講演謝金、研究協力者金、その他の謝金）				200000
消耗品等経費				100000
その他				
合計				750000

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

本年度 11 月に実施したシンポジウム「考古学からみた古代東アジアの馬利用」の報告者 5 名の論考と、班員らによる展望・コラムなどを収録した一般向けの書籍を次年度末に刊行する予定である。